

令和 8 年度 帰国生入学試験
帰国生③ 入学試験問題

国語

注意

1. 答えは解答用紙のきめられたところに書きなさい。
解答らんをまちがえると、得点になりません。
2. 解答用紙に受験番号を書きなさい。
3. 試験時間は 5 0 分です。

昭和学院中学校

一次の文章は、二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災と震災からの復興について書かれたものです。これを読み、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合上、表記を変えたところがあります。

※句読点や記号も一文字分とする

復興とは「地域づくり」でもあるはずです。どの地域も、より魅力的な地域にしようと奮闘を続けてきました。復興というと被災地特有の出来事のように思えますが、復興とは、地域の魅力を膨らませ、課題は小さいものにする、つまり本質的には地域づくりです。それなのに、魅力的な地域の源泉となる風景を破壊し、形だけが整えられた安全なまちを目指しても、それを地域づくりといってしまうのでしょうか？

「復興」の名の下に、中身の無い、がらんとした器のようなまちを地域の人たちに手渡して、「あとは皆さんの努力でがんばって」と放り投げてしまふ。それは復興とはいえない。

ア

、衰退を早めているだけじゃない

かとすら思います。たしかに防潮堤でまちは安全になった。公共事業で地域も多少は潤った。けれど、あと三〇年もしたら、高齢化によって、そのまちに住む人はさらに減っていきます。数兆円とも言われる予算を使っても建造した巨大防潮堤は、三〇年後、そのまちの一体何を守るのでしょうか。

この九年半、メディアには「風評被害に苦しむ生産者」や「震災復興に取り組む団体」が数多く登場しました。中学生が合唱コンクールで金賞を獲得すれば「復興の歌声」になり、高校野球で福島代表が勝利すれば「復興への力」になり、生まれたばかりの子どもは皆「復興への希望」といった具合に、復興の物語が再生産されていきます。そうやって、被災地はメデイ

アによって外側から「復興に向けて頑張る被災地」像を押しつけられてきました。

一方で、A内側から「頑張る被災地像」を求めていく動きもありました。

これは「助成金」や「復興予算」に絡む取り組みに関係しています。国から予算を取るには「まだ復興していない」状態でなければなりません。課題があるからこそ復興予算を使う権利があるわけです。すると、申請書に記載される課題は大きいほうがいい。まちづくり系の事業で予算を引張るには「コミュニティの再生」が、地域物産系では「風評被害」^{※1}払拭のため^{※2}が大義名分になります。復興するために、復興していない状況を必要としてしまうのだとしたら、復興から遠ざかることにほかなりません。

ぼくは、B復興というのは「復興という言葉が必要としなくなる」ことだと思っています。けれども、逆に復興しようと思えば思うほど自立できない状況を作ってしまう、「復興」という言葉に依存してしまう、そんな【X】があるように感じます。これは、地域づくり全般に言えることかもしれません。復興という^{※2}マジックワードではなく、もつと^{※3}ヴィヴィッドに課題に光を当てる個別の言葉が必要です。

災害が起きる。課題が深まる。そこには必ず「当事者」という存在がい

ます。困難を余儀なくされた人にとって「当事者」という言葉は重要です。似たような困難を抱えている人たちの間に共感を生み、理解者を増やす言葉でもあるからです。

イ

、その一方で、当事者という言葉は「非当事者」という存在をじんわりと浮かび上がらせてしまうとも感じています。

「当事者じゃない人にはわかるまい」と言われたら、外側にいる人は「当事者じゃない自分には関係ない」と思ってしまうだろうし、かえって迷惑

をかけてしまうんじゃないか、自分には関わりがない、と感じてしまうでしょう。課題が重いほど社会全体で支えなければいけないはずなのに、

C 当事者の外側にいる人のゆるい関わりを難しくしてしまうわけです。

震災と原発事故もそうでした。この九年間は当事者のリアリティが強く働いた時期でもあったと思います。私たちの苦しみはあなたにはわかるまい。当事者ではない人間は口を出すな。そう言われると、外の人は関われなくなってしまういます。誰かが決めた「正しい関わり」以外の関わり方が排除されてしまうわけです。

ウ、「あなたは〇〇町の地域づくりの当事者ですか？」と聞かれたらなんと答えますか？自治体の職員や地域の企業の経営者、拠点を持って場を運営している人、明確に目的を持って課題解決を仕事にする人たちは自らを当事者だと答えるかもしれません。けれど、「当事者と言われるとなんだか腰が引ける」という人も多はず。好きでお店を運営してるけど商工会に入ってるわけではない。防災に興味はあるけど消防団に属してはいない。地方都市に住まいがあるけど別のまちにも家があって二拠点生活だとか、いや、住んですらいけないけどお気に入りの場所があって通ってるとか。そんな関わりを、ポジティブに掬い取りたいとぼくは考えてきました。「当事者」、つまり「事に当たっている」わけではないけれど、「事を共にしている」という人は結構いる。そんな人を「当事者ではない」なんて排除してはいけません。

課題があるところには、必ず議論が起きます。深刻な課題ほど議論は二分化され、徹底して課題に寄り添うのか、あるいは突き放して反対するのか、関わりが「賛成／反対」で分断されていくように感じます。政治的な

党派性を持ち込まれ、議論は進まず、分断がさらに進む。そんな時代だからこそ、ぼくは、当事者性や専門性に左右されない「ゆるい関わり」が必要なのではないかと考えるようになりました。当事者性の濃さや専門性の高さに囚われることなく、本書で何度も示してきたような、個人の興味や関心を通じて課題と関わる回路が必要だと。ぼくは、D そんな関わりを「共事／共事者」と呼んでいます。自分は当事者とは言えないけれど、事を共にしてはいる。関心はある、気になって見ている。けど具体的にはまだ行動に移せていない。そんな人たちをイメージしています。

問題が深刻なほど、課題が大きいほど、活動は、その地域の課題を解決する「ために」行われるようになります。つまり、目的先行型の関わり、前の章で紹介した「※4 やるコミュニティ化」していくわけです。課題が差し迫っているのだから仕方がないのかもしれませんが、でも、それだけとなんだか息が詰まる感じがします。景色がいいとか、食べ物が美味いとか、山が好きとか友達が住んでるとか、そういう個人の思いから生まれる関わりがあつていいはずだし、ぼくはいつもそういう関わりを作ってきました。

E 地域は、結果的に元氣になればいい。ぼくは行政マンでもなければ大学の研究者でもないし、ジャーナリストでもない。まずは自分や家族、友人の人生を豊かにすることが大事であつて、そのついでに、結果として、地域も豊かになればいい。明確な目的を掲げることなく、まずは自分の楽しさを優先する回路を守りたい。震災でも、それを強く思いました。当事者として「やる」コミュニティだけではなく、共事者として「いる」コミュニティ、共事的な関わりがもつと増えていくといいなと思っています。新しい場に人が集うようになれば、きっとあとづけで公共性が生まれて

いくはずで。【Y】だった人が踏み込んで【Z】になることだつてあるでしょう。ぼくは、その地域をたまたま好きになってしまった人の極めて個人的な取り組みが、ひょんなことから社会に開かれ、課題と接続されてしまう、そんなエラーみたいな関わりに希望を感じます。なぜなら、ぼくがそうだったからです。

(小松理虔『地方を生きる』より)

(注) ※本文中の漢字については、学習指導要領における小学校の配当以外の難しい漢字にはふりがなをふっています。

※1 払拭……すっかり取りのぞき消し去ること。

※2 マジックワード……宣伝や説得などに効果のある言葉。

※3 ヴィヴィッド……生き生きとしているさま。

※4 やるコミュニティ化……個人のスキルを元にして、何らかの

課題に向き合う目的を達成するためのコミュニティ(集い)になると。

問一 空らん ア ウ にあてはまる語句の組み合わせとして最も

適当なものを、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

- 1 ア むしろ イ つまり ウ たとえば
- 2 ア だから イ つまり ウ しかし
- 3 ア むしろ イ けれども ウ たとえば
- 4 ア つまり イ しかし ウ さて

問二 ―線部A「内側から『頑張る被災地像』を求めていく動き」とありますが、このような動きがあるのはなぜですか。その理由を本文中の言葉を用いて五十文字以内で説明しなさい。

問三 ―線部B「復興」とありますが、筆者は「復興」とはどういうことだと述べていますか。それを説明した部分を本文中から探し、「こと。」に続くように二十二文字で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問四 空らん【X】には「二つの相反する事柄の間で、板ばさみになつている状態」を表す語句が入ります。空らんにあてはまる語句として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

- 1 バリア 2 ジレンマ 3 マニユアル 4 フィルター

問五 ―線部C「当事者の外側にいる人のゆるい関わりを難しくしてしまう」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

1 「当事者」という言葉から「課題に直面している人」という印象を強く与えてしまい、「当事者」ではない人を関わりから排除してしまうから。

2 「当事者」という言葉が「当事者／非当事者」の分断を生むことにつながり、「当事者」以外の立場の人に関わることをためらわせてしまうから。

3 「当事者」という言葉から、課題に直面している人たちがその課題を自ら解決すべきだという風潮が生まれ、「非当事者」が関わることに消極的になってしまうから。

4 「当事者」という言葉が同様の課題を抱える人々の間に共感を生み、その結束を強くするが、それにより、当事者に「非当事者」の介入を拒ませてしまうから。

問六 ―線部D「そんな関わりを『共事／共事者』と呼んでいます」とありますが、「共事」的な関わり方の具体例として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

1 旅行者が友人と被災地の温泉宿に宿泊し、その思い出をSNSで発信すること。

2 旅行代理店が観光業支援^{しえん}として、被災した地域の観光地を巡る^{めぐ}旅行商品を発売すること。

3 被災地の自治体職員として、復興のために被災者の生活支援に当たること。

4 水産業者が物産展を開催し、被災地で獲れた海産物の販売をする^とこと。

問七 ―線部E「地域は、結果的に元気になればいい」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

1 個人の活動がすぐに課題の解決にはつながらなくても、その後の課題解決のきっかけになるということ。

2 個人が地域の活性化を目標として活動し、その結果として地域が豊かになること。

3 まず、個人が人生を豊かにし、その後で地域の活性化に向けて行動を起こすということ。

4 個人が課題解決のためではなく、自身のために行動した結果として、地域が活性化するということ。

問八 空らん【Y】【Z】には「当事者」または「共事者」のいずれかが入ります。あてはまる語句をそれぞれ答えなさい。

問九 次の会話文は、この文章を読んだ生徒たちの会話です。問違った発

言をしている人を、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

1 Aさん―「筆者は、『復興』という言葉が不要になることが本当の意味での『復興』だと考えているんだね。」

2 Bさん―「筆者は、課題の『当事者』ではないけれど、関心を持って見ている人のことを『共事者』と呼んでいたよ。」

3 Cさん―「筆者は、『共事者』として課題の解決に関わるためには、『目的先行型』の関わりが不可欠だと述べていたね。」

4 Dさん―「筆者は、『当事者』として活動しなくても、『共事的』に課題に関わることで、公共性が生まれることもあると言っているね。」

二 次の文章は、詩雨ゆず「ひいおばあとジュゴン」(「こすもすペーカリ

ー物語」より)の一節である。沖縄に暮らす小学六年生の「あたし(りな)」は、「ひいおばあ」が子どもの頃に海でジュゴンを見たという話を聞き、ジュゴンについて図書室で調べた。すると、かつて辺野古の海にはジュゴンが多く生息していたが、開発や基地の影響で数を減らし、現在は絶滅の危機にあることが分かった。これを読み、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合上、表記を変えたところがあります。

※句読点や記号も一字分とする

学校からの帰り、あたしはいつもの道から外れて、海へ向かった。ジュゴンの話が、忘れられなかったからだ。

浜から見る海は、あたしが小さかった頃と何もかわらない。それでも、水の中では大きな変化が、今も起きているのだ。

もしもサンゴや海草がなくなったら…。

たぶんジュゴンだけじゃなく、魚もいなくなるかもしれない。そうになったら、今食卓にならぶ魚も、食べられなくなるのだ。当たり前にあるものが、急に目の前から消える。

背に、すつと冷たい手でなでられた感触がはしった。それはあたしが一年生の時、おじいさんが死んだ時に味わった感じに似ていた。

おじいさんは漁師で、いつものように海に漁に出た。船が沖に出たところで、急に海が荒れだして、おじいの船は高波にのまれて転覆した。救助は、間に合わなかった。

おじいがいなくなった生活は、パズルのピースが外れてなくなったよう

な寂しい日々だった。それがいつの間にか、いなくて当たり前のように暮らしていた。

もしも海に何もいなくなったら、おじいのことと同じように、はじめは悲しむかもしれない。でも、Aそれもいつしか、いけないことに慣れてしま
うのだ。

ぼんやりと海を見ていたら、波の音がうるさいほど耳に響いた。目の前に広がる海はうねり、浜に高い波が打ち寄せる。いつもより潮の流れが早いのか、スカイブルーの海に、群青や藍の縞ができていた。あたしはジュゴンを探しながら、浜辺を歩きだした。

「りなちゃん、前見て歩かないと、危ないよ」

聞き慣れた声にびっくりして、前を見た。

ひいおばあが浜辺に組み立てられた運動会などで使うテントの中で、イスに座っていた。あたりを見回せば、斜め向かいの座間さん家のおじい、クラスメイトのさおりんのおばあ……。辺野古に住むおじいとおばあ
の半分ほどが、そこにいた。そのおじいとおばあに混じって、となりのたけ兄さんや見かけないお兄さんやお姉さんまで、テントの中にいる。みんな、ただイスに座って海を見ていた。

「ひいおばあ、ここで何してるの？」

「海を守ってるんさ。おばあは、ここにすむジュゴンに助けてもらったから」

そう言うひいおばあが、Bスカートのポケットから赤茶けた紙を取り出した。その紙のはしは、ところどころすり切れている。長い年月を過ごしてきて
いるものようだった。ひいおばあはその紙を、あたしの方に差し

出した。それは、写真だった。

「いつも持ち歩いてるの？」

「海にくる時はね」

そう言うて、ひいおばあははにかむように笑った。写真は海を背景に、男の人と女の人が寄り添っているものだった。二人まぶしそうに目を細めて、笑っていた。写真の男の人の顔は、父さんにちよつと似ていた。

「こつちが、りなちゃんのひいおじい。こつちはひいおばあだ」

そう言うて、ひいおばあは自分を指さした。ひいおばあの若い頃って、こんなにかわいかったのか。しげしげと写真を見ていたら、ひいおばあがぼそりとつぶやいた。

「この一年後に、ひいおじいは戦争に行つてね、帰つてこなかった」

「えっ？」

あたしは、ひいおばあ顔を見た。ひいおばあは目をしばたかせてから、あたしをまっすぐに見た。

「ひいおじいが戦争に出て何か月か後、この辺野古が爆撃されたんだ。今までそんなことはなかったからねえ。辺野古のみんな、裏の森にいくつかつ
くつた防空壕へ避難したんさ。一つの防空壕に、二、三家族が肩寄せあつて入つたんだよ」

ひいおばあはそこで言葉をきつて、Cじつと黙つて海を見ていた。

「それから、どうなったの？」

「だんだんと爆撃がひどくなつてね。そのうちに米兵が上陸して、嘉手納飛行場が占領されたんさ。あつという間に、辺野古まで米軍がやってきた。ひいおばあのお腹には、その時、りなちゃんのおじいがおつた」

森の外では米兵が、周囲を囲んで銃口をかまえていた。そんな時に、ひいおばあたちの防空壕に貯えてあった食糧が底をついた。

「北部は疎開地域になっててね。こうなったら、東村へ逃げようってことになったんだよ」

あたしは気になって、ひいおばあに続きを促した。

防空壕にいる人たちは、ふたつに分かれた。村を離れたくない人と、ひいおばあのように辺野古の北にある東村へ逃げる人。昼間に轟く空爆の恐怖に加えて、今度は飢え死ぬ恐怖が押し寄せてくる。その恐怖のはさみうちに、ひいおばあはじつとしていらなかった。危険でも、くぐりぬければ生きられる可能性があるほうを、ひいおばあたちは選んだのだ。

そして夜、避難する人たちでひとかたまりになって森を出た。夜なら、攻撃の手もゆるむだろうと思っただのだ。みんな、北へ向かって走る。そのとたん、米兵の怒鳴り声が飛んできた。その声にはじかれて、ちりぢりになった。われ先にと、みんな競うように走って行く。しかし、ひいおばあは大きなお腹がつつかえてうまく走れない。まっさきに米兵に捕まりそうだった。

「ねーね、手を」

心配した妹が、ひいおばあへ手を差し伸べた。お母さんも、手を差し出す。ひいおばあは二人の手を握りしめた。お母さんと妹が、ひいおばあを引っ張って走った。みんな必死だ。しかし、後ろから迫る米兵の足音は、どんどん近くなる。

(中略)「ひいおばあ」が米兵に追われ、母と妹は体当たりして彼女を逃がそうとするが撃たれてしまう。恐怖で動けなくなった「ひいおばあ」は、「ひいおじい」の幻に導かれ、海へ身を投げた。」

「ぶくぶくと沈んでいって、お腹の子にごめんねえって謝って。お母さんと妹に謝って。そのうちに、頭の中がぼんやりしてきて、目の前が暗くなつたときに、遠くからジュゴンがやってくるのが見えたんさ」

死ぬかもしれない時なのに、ひいおばあはそのジュゴンを不細工だなど思っただけだ。

「そのジュゴンがね、ひいおばあのを背を押してくれたんさ」

意識が薄れていくひいおばあを、ジュゴンは海面に押し上げた。ひいおばあは助かった。

「きつとひいおじいが、ジュゴンにお願いしてくれたんさあ」

そう言っ、ひいおばあは海を見た。海のかなたに、ひいおじいを見ていたようだった。

「辛くても、悲しくても、ここにすれば、ひいおじいのジュゴンのことを思い出す。犠牲になったお母さんと妹のことを思い出す。『がんばって生きないと、みんなに怒られる』それが、一日を生きる合言葉だった」

きつぱりと言うひいおばあは、今まで見たことのない厳しい目をしていて。この海は、ひいおばあへの命の支えなのだ。ひいおばあが生きのびたら、おじいが生まれた。ひいおばあたちが守った命は父さんにつながり、あたしにつながった。この海が、あたしの命をつくったのだ。あたしは海に向かって、背筋をしゃんと伸ばした。

ひいおばあの横にあつたイスに座って、海を見た。色とりどりのカヌーが浮かんでいる。彼らは那覇防衛施設局から、海底調査をするために派遣されてくるダイバーたちを、見張っているのだそう。

「ひいおばあ、いつから座り込みをしてるの？」

「ずいぶん前だねえ」

基地移設の話が具体的に持ち上がった時からだと、ひいおばあはつけ加えた。

ダイバーは海底調査を理由に、サンゴ礁へ杭を打ち込もうとする。それをやめるよう説得するために、おじいたちは座り込みをはじめた。今では、全国から人が集まってきているそう。ここに座り込む人たちのルールは、ただひとつ。

絶対に暴力を振るわない。

座り込みをしているおじいたちは、ダイバーや施設局の人たちと接触しないように距離をとって、説得をする。それなのに施設局の人たちは、強引におじいたちを押しつけたりするそう。時々暴力も振るうって、近くにいたおばあが教えてくれた。

「なんでやり返さないの？ 目にはXをって言うでしょ」

あたしがそう言うと、ひいおばあは

「暴力は、なにも解決しないからね」

と言った。よく笑うのんきなひいおばあが、急にDあたしが憧れるNBAのバスケットボール選手のように思えた。きりりとして、かつこよかった。

太陽が水平線近くまできた時、ひいおばあは「帰ろう」と言った。

「まだ座ってなくていいの？」

「大丈夫。この時間になったら、もう施設局の人もこないさ。帰って夕飯の支度をしないと、母さんがおなかと背中をくつつかせて、まいってしまふよ」

ひいおばあは、いたずらっぽく笑った。ひいおばあらしい。ひいおばあは笑顔には、かなわない。あたしはつられて笑っていた。ひいおばあの骨張ってしわくちやの手が、あたしの手をやさしくにぎった。

夕食の支度がすんだ時、父さんが帰ってきた。みんなで食卓を囲んでご飯を食べながら、あたしは今日の話を話した。母さんは眉間にしわを寄せて、

「おばあ、ひどいさ。りなを誘うなんて……」

と、ひいおばあをにらみつけた。

「決めつけないでよ。ひいおばあは一回も、あたしを誘ってない」

あたしはひいおばあをかばって、母さんをにらみ返した。

「あなたが反対しているって噂になったら、お父さん、仕事なくなっちゃうのよ！」

「だから……」

反論しかけたあたしの言葉を、ひいおばあが強い口調でさえぎった。

「ジュゴンを守ることは、やめない。ジュゴンはあの海の、この沖縄の、

平和の象徴だ」

ひいおばあの剣幕に、母さんは明らかに身構えた。それを見たひいおばあは、持っていたはしを机に置いた。母さんを真っ正面に見すえて、ひいおばあは説得しはじめた。

「※1 慶文が基地で働いてるから、困るといのは、わかる。でもね、あの海に基地が建ったら、この地が再び戦場になるんさ」

自分が味わった戦争のことを話してから、こう言葉を結んだ。

「私は自分が体験したことを、りなちゃんにまで背負わせたくない。絶対に」

ひいおばあはきっぱり言うのと、しばらく母さんを見つめていた。その目は、少し潤んでいた。

E母さんは少しくつむいて、ひいおばあに反論をしなかった。母さんのこの態度は、意外だった。もっとひいおばあに食いつくと思っていたのに。

本当は、母さんもひいおばあの言うことに、賛成したいのかもしれない。

(父さんのことがあるから、できないのかな)

ちらりと父さんを見た。新聞を見ながら、オリオンビールをコップに注いでいた。

あたしはしばらくはしを動かすことができず、じっと父さんを見つめて沈黙の行方待った。父さんの新聞をめくる音だけが、響く。ひいおばあも母さんも、誰も動かず、しばし見つめあう時間が続いた。

父さんが新聞から目を上げてゴーヤのピクルスをつまみ、最後のビールを飲み干した。

(注) ※本文中の漢字については、学習指導要領における小学生の配当以外

の難しい漢字にはふりがなをふっています。

※1 慶文……「あたし」の父親の名前。

問一 —線部A「それもいつしか、いないことに慣れてしまうのだ」とありますが、「あたし」が抱いている危機感についての説明として最も適当なものを、次の1〜4のうちから一つ選びなさい。

1 海の環境が壊れて生き物がいなくなってしまう恐怖と、今後の生態系にもたらす影響への心配を表している。

2 大切なものを失った悲しみが時とともに薄れ、失ったことが当たり前になることへの不安を表している。

3 「おじい」の死を経験したことで、これから先に起こる悲しい出来事を防げないとあきらめる気持ちを表している。

4 自分の力では何もできないと感じ、未来の環境問題に対して解決ができずに絶望する気持ちを表している。

問二 —線部B「スカートのポケットから赤茶けた紙を取り出した」とありますが、「赤茶けた紙」の写真は「あたし」にとつてどのような意味を持っていましたか。その説明として最も適当なものを、次の1〜4のうちから一つ選びなさい。

1 二人の幸せな思い出を写したもので、「あたし」が「ひいおばあ」の過去を知るきっかけになった。

2 「父さん」と「ひいおじい」の顔が似ていることに気づき、家族のつながりを実感することになった。

3 戦争による家族の死を思わせるもので、これから語られる「ひいおばあ」の悲劇を予感させた。

4 「ひいおばあ」が大切に持ち歩くもので、「ひいおじい」への思いを「あたし」が受け止める手がかりになった。

問三 ―線部C「じつと黙って海を見ていた」とありますが、この時の「ひいおばあ」の心情を「戦争」「恐怖」という言葉を使って、四十字以内で説明しなさい。

問四 空らん X に入る言葉を、漢字一字で答えなさい。

問五 ―線部D「あたしが憧れるNBAのバスケットボール選手のように思えた」とありますが、なぜですか。最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

- 1 相手への抵抗の中で迫力を示したため、力で戦う競技者の姿に重ねたから。
- 2 年齢に合わないほど力強い動きが見え、体つきが選手のように感じられたから。
- 3 非暴力を貫く強い意志と人を導く態度に触れ、精神的なリーダー像を見たから。
- 4 普段との落差によって表情や姿勢が際立ち、思いがけず特別な存在に見えたから。

問六 ―線部E「母さんは少しうつむいて、ひいおばあに反論をしなかった」とありますが、ここから読み取れる「母さん」の心情の説明として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

- 1 夫の仕事への影響を心配し、「ひいおばあ」の活動に反対するが、内心ではその主張に共感している。
- 2 「ひいおばあ」の考えには全く賛同しておらず、「あたし」が座り込みに参加することへも反対している。
- 3 家族内の平穏を最優先に考えており、基地問題については、関わりたくないという明確な意思を示している。
- 4 夫の意見に全面的に同意しており、「ひいおばあ」の行動は、家族に対して迷惑をかけると考えている。

問七 「ひいおばあ」が戦争を生き抜く上での「合言葉」としていた言葉を、本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問八 本文において、「ジュゴン」はどのような存在として語られていますか。本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問九 本文において、「あたし」が「ジユゴン」に対して抱く感情や認識は

どのように変化していききましたか。その説明として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

1 当初はあまり興味を抱いていなかったが、「ひいおばあ」の語りを通じて、家族の歴史と苦難を乗り越えた命の象徴として深く認識するようになった。

2 最初は単なる海の生き物として捉えていたが、戦争の記憶と結びつくことで、二度と悲劇を繰り返さないための行動を促す存在へと変容していった。

3 はじめは環境問題の一環として関心を持っていたが、「ひいおばあ」の個人的な体験を聞くことで、自身の命の源流と深く関わる存在だと理解を深めた。

4 幼少期からぼんやりとした憧れを抱いていたが、「ひいおばあ」の過去の物語に触れることで、自己の存在意義と直結する守るべき対象として捉えるようになった。

三 次の―線部のカタカナを漢字で書きなさい。

1 海は天然資源のホウコである

2 ソウガンキヨウを買う

3 この仕事にはセキニンがともなう

4 教室のソウジを行う

5 映画のヒビヨウをする

6 決まりをヤブってはいけない

四 次の四字熟語の―線部を漢字で書きなさい。

1 一日センシュウ

2 ムカ夢中